

2001 年度卒業論文

「モンターグ夫人が見た 18 世紀のオスマン帝国社会」

女性の暮らしを中心に

8596080

紺野 文

「モンターグ夫人が見た 18 世紀のオスマン帝国社会

女性の暮らしを中心に」

はじめに

第 1 章 メアリー・ウォートレー・モンターグ

- 1) その誕生から結婚まで
- 2) 結婚生活
- 3) 後半生
- 4) イギリス文学史上の評価・研究史

第 2 章 18 世紀初頭の社会におけるオスマン帝国への旅

- 1) オスマン帝国とヨーロッパの関係
- 2) ラーレ・デヴリ
- 2) メアリーのオスマン帝国への旅

第 3 章 『トルコ書簡集』にみる女性たちの姿

- 1) 女性の服飾
 - 1 - 1 メアリーの服飾観
 - 1 - 2 衣装の概要
 - 1 - 3 装飾品
 - 1 - 4 ヴェール
- 2) 日常生活
 - 2 - 1 主人と奴隷の関係
 - 2 - 2 住まい
 - 2 - 3 食事
 - 2 - 4 娯楽
- 3) 入浴文化
 - 3 - 1 公衆浴場の歴史
 - 3 - 2 メアリーのハمام体験
 - 3 - 3 ハمامの日常性と非日常性

おわりに

添付資料：地図・絵で見る 18 世紀の女性の姿（本論中に掲載）

別冊：『トルコ書簡集』日本語全文訳

はじめに

人は誰でも、旅をするとその様子を書き綴りたくなるものであり、古代から旅行記は数多く存在する。イギリスの女流文人メアリー・ウォートレー・モンターグ (Mary Wortley Montagu, 1689-1762) も、まさに旅をして、その様子を手紙の形で克明に国に書き送った人である。その手紙が、後に『トルコ書簡集』¹となったのだ。1716年、メアリーは、夫がオスマン帝国大使になったのについて、一緒に旅をすることになった。ヨーロッパからは陸続きとはいえ、イギリスから、東洋の大国であったオスマン帝国への旅は、何日をも要する大旅行であった。途中のヨーロッパの国々はまだしも、オスマン帝国は彼女にとって未知の世界である。見るものすべて、新鮮に見えたに違いない。

ところが、メアリーの書いた『トルコ書簡集』は、単なる旅の様子を伝える旅行記にはとどまっていないのである。もともと、彼女はイギリスで女流文人として知られる人であり、観察眼の鋭い女性である。女性ならではの視点から大変熱心に異文化世界を観察し、特にトルコの女性たちについて詳細に語っている。また、自分の思いを表現し得るほどの彼女の豊かな教養が、この手紙を文学的なものとしていると言われる。18世紀のオスマン帝国、特に女性たちの生活について知ろうとする時、これほど詳細で生き生きとした資料は、他に存在しないだろう。特に、ハレムや公共浴場の話、女性の衣装のことなど、この上なく豊かに記述されているのである。このことは、メアリーがトルコの習慣や女性たちに、大変に魅了されたことを示しているだろう。メアリー個人の人生を考えてみても、この旅の影響は多大なものとなるのである。

本論では、イギリス女流文人としてのメアリーを対象とするのではなく、この『トルコ書簡集』に表れる、メアリーの目に映った女性たちの生活に焦点を絞って、18世紀の女性の姿を考察したい。そこで、第1章ではメアリーの生涯とこれまでになされてきた研究について触れ、第2章ではメアリーの生きた時代のオスマン帝国と、ヨーロッパ諸国の関係、さらに1716年から18年にかけてのメアリーのオスマン帝国への旅の概要をまとめる。続く第3章では、テーマごとに分けて、『トルコ書簡集』を用いながら、メアリーの見たオスマン帝国・女性たちの姿を追うこととする。この作業は、女流文人として後に名をなすメアリーの、思想形成を明らかにすることにもつながるだろう。

¹ 英語の原題は '*Embassy Letters*' であるが、日本語では多くの場合『トルコ書簡集』と訳されるため、本論でも以下『トルコ書簡集』とする。

第1章 メアリー・ウォートレー・モンターグ²

1) その誕生から結婚まで

『トルコ書簡集』の筆者、メアリー・ウォートレー・モンターグの生涯は、長く波乱に満ちたものであった。オスマン帝国への旅が、彼女の人生に大きな影響を与えたのは事実であるが、それ以外の面でも、彼女は当時の女性としては、かなり特異なパーソナリティーの持ち主であったことがうかがえる。大胆な行動力や注意深い観察力、それに加えて学問的な知識があつてこそ、『トルコ書簡集』が完成したのである。つまり、メアリーの人となりや生き方を知ることによって『トルコ書簡集』の理解がより深まると考え、まず彼女の生涯と、それに加えてこれまでの評価を簡単になぞってみたいと思う。

メアリー・ウォートレー・モンターグは、1689年、イングランドにおいて、父エヴェリン・ピエールポントと母メアリー・フィールディングの間に、長女として誕生した。ピエールポント家は代々続く、貴族の家系である。メアリーの誕生後、立て続けにフランセス、エヴェリン、ウィリアムと3人の子供が生まれているが、1693年に母は死去している。

母の死後、子供たちの教育にはあまり関心のなかった父親に代わり、父方の祖母、エリザベス・ピエールポントが子供たちを教育することとなった。祖母の家はソールスベリーの近くのウェスト・ディーンというところにあり、自然も多くて、子供には大変良い環境であつたらしい。しかし、祖母がかなり厳格な教育を実践したこともあつてか、メアリーにとってはあまり良い思い出がないようだ。後に、メアリーが娘への手紙の中で表した「私は、沈む夕日をつかまえようとして走ったけれど、どうしてもつかまえられなかったのです…。」という当時の話は、何かを常に追い求めているかのようであつた、後のメアリーの人生を考えると、大変に印象的なエピソードである。

1697年、メアリーが9歳の時、祖母のエリザベス・ピエールポントが死去する。祖母の死後は、主にソールスベリーの家と、ロンドンの父の邸宅で過ごすこととなった。幼いメアリーが何よりも好きだった場所は図書館で、そこで数多くの英語、フランス語の本を読みふけたという。特に好んで読んだものとして、フレッチャー³、コルネイユ⁴、ドライデン⁵、モリエール⁶、コングリー

² 本章は主に Jack Malcolm, *Lady Mary Wortley Montagu: The Turkish Embassy Letters*. London, William Pickering, 1993, pp. 7-34 および Dervla Murphy, *Embassy to Constantinople: The Travels of Lady Mary Wortley Montagu*. New York: New Amsterdam, 1988, pp. 7-38. による。

³ John Fletcher (1579-1625) イギリスの劇作家・詩人。『世界人名事典』岩波書店、1997年、1268頁。

ヴ⁷、などの名前があがっている。このような本を読むことによってメアリーの文章力が鍛えられたのは、言うまでもないことであろう。メアリーには家庭教師もついていたのだが、メアリーは後年、「世界で一番ひどい家庭教師であった。」と語っている。同じ頃、詩や物語などを書き始め、ラテン語を学んで古代のラテン語詩の翻訳を行っている。

1707年、メアリーが18歳になる頃には、父のエヴェリン・ピエールポントの出世により、メアリーもロンドンに出て、絵画や彫刻、イタリア語などの貴族的な教育を受けるようになる。同じ頃、自宅で開かれる父のパーティーでホスト役を務め、そこで著名な文筆家たちと知り合った。その中には、ウィリアム・コングリーヴ、リチャード・スティール⁸、ジョセフ・アディソン⁹、などの名前が見られる。

同年冬、メアリーはついに社交界へのデビューを飾る。社交的なメアリーは数多くの友人を作るが、中でも、アン・ウォートレーという女性と親しくなる。このアンの兄にあたるのが、後にメアリーの夫となるエドワード・ウォートレー・モンターグ(1684-1761)であった。ウォートレーは大変裕福で、ウェストミンスターやケンブリッジの大学で勉強後、1705年には21歳の若さで議員に選ばれたほどで、その将来は大変輝かしいものに思われた。また、アディソンやスティールなどの文化人とも、親しい付き合いをしていたようである。妹アンを通して2人は知り合い、ウォートレーはメアリーへ、贈り物や手紙などを送るようになる。また、仲介役であったアンが1709年に急死するも、2人の仲は深まっていく。メアリーにとって、ウォートレーは対等に議論をすることができる、よき話し相手でもあった。ところが、メアリーの父は、2人の仲を認めようとはせず、結婚問題は長いこと暗礁に乗り上げ、さまざまな手が尽くされる。この結婚に関するやりとりの様子は、メアリーとウォートレーとの

⁴ Pierre Corneille (1606-84) フランスの劇詩人。フランス古典悲劇の完成者。『前掲書』、554 - 555 頁。

⁵ John Dryden (1631-1700) イギリスの詩人・劇作家・批評家。18世紀の合理主義的文学の走りと言われる。『前掲書』、926 頁。

⁶ Molière, 本名 Jean Baptiste Poquelin, (1622-73) フランスの喜劇作家・俳優。性格喜劇を作り上げ、その作品は後の演劇に大きな影響を与えた。『前掲書』、1545 頁

⁷ William Congreve (1670-1729) 復古劇の最も優れた作家で、風俗喜劇を完成した。代表作『浮き世の習い』(*The Way of the World*, 1700) 相島倫嘉 『イギリス文学の流れ』南雲堂出版、1994年、89 頁。

⁸ Sir Richard Steele (1672-1729) タトラー (*The Tatler*) という大衆新聞を編集・発行。イギリス独自のエッセイの創始者でもある。『前掲書』、94 - 95 頁。

⁹ Joseph Addison (1672-1719) スティールの新聞に論説・詩等を寄稿。政府に詩才を認められ、フランス・イタリアに旅行している(1699-1704)。後に官界にも入り、メアリーがオスマン帝国へ滞在していた頃(1717)には、国務相となっていた。『前掲書』94 - 95 頁。

間で交換された手紙に、読み取ることができる¹⁰。そして、1712年、ついに2人は駆け落ちを実行、晴れて結婚することとなったのである。メアリー23歳の時のことであった。

2) 結婚生活

これほどお互いに望んでの結婚であったのに、2人の関係は、すぐに冷めてしまったかのように見えた。ウォートレーは政治活動に忙しく、その不満を、メアリーはウォートレーに書き送っている¹¹。結婚後1年して、息子エドワードが誕生するが、2人の関係は特に変わらなかったようである。1714年にアン女王が死去し、ハノーヴァー朝からジョージ1世が即位、イギリスの政局は大きく変化した。新しく議員選挙が行われるにあたって、メアリーはウォートレーに出馬を勧める。かつて、議員であった父のパーティーでホスト役を務めていたこともあり、またそのような華やかな社交の場に、身を置きたいと考えてのことと思われる。ウォートレーは期待通りにウェストミンスター議員に当選し、翌年、メアリーもロンドンへやって来る。2人の新居は、ロンドンのセント・ジェームス宮殿にもほど近かった。明るく機知に富むメアリーは、ジョージ1世にも気に入られ、宮廷を中心とした社交生活を展開していった。

同じ頃、メアリーは、アベ・コンティ¹²やアレクサンダー・ポープ¹³などの知識人たちとの交流を深めるようになる。中でも、アレクサンダー・ポープとは大変に親しく、2人共同で、ヴェルギリウス¹⁴の田園詩を風刺的に作り変えるなどしていた。この作品には、2人のするどい洞察力がよく表れている。

¹⁰ 結婚に際する2人の手紙のやり取りは、Richard Halsband, *The Complete Letters of Mary Wortley Montagu*, volume 1-3, Oxford, Oxford University Press, 1965-7, volume 1/ pp. 24-166 に往復書簡の形で掲載されている。

また、Isobel Grundy, *Lady Mary Wortley Montagu: Selected Letters*, England, Penguin Books, 1997, pp. 17-95. において、メアリーがウォートレーに送ったものの一部を読むことができる。

¹¹ Halsband, *op. cit.*, pp. 168-246. Grundy, *op. cit.*, pp. 97-131.

¹² Antonio Conti (1677-1749) イタリアの学者。1715年のロンドン訪問中、メアリーと出会う。後に1717-18年にかけて、再びロンドンを訪れた。

¹³ Alexander Pope (1688-1744) 風刺詩人。『人間論』(An Essay on Man, 1733-34) 『愚者列伝』(The Dunciad, 1728-43)などで、世間に対する大変鋭い風刺を行った、理性派文学の完成者。古代ローマの作品の翻訳にも力を尽くす。幼い頃に大病をし、生涯不具と病弱に悩んだという。相島、前掲書 101 - 104 頁。メアリーの『トルコ書簡集』には、ポープ宛の手紙が数多く見られる。

¹⁴ [羅]Vergilius Maro Publius [英]Virgil (AD 70-19) ローマ第一の詩人。田園風景の情景の美しさと、その抒情の巧みさは、ラテン文学第一と言われる。『世界人名事典増補版』岩波書店、1981年。『トルコ書簡集』の中でも、メアリーはポープにたびたびヴェルギリウスの詩について書いている。

1716年、夫ウォートレーはオスマン帝国大使に任命されてメアリーと一緒にオスマン帝国へ赴き、『トルコ書簡集』を書くに至るのだが、この詳細は第2章で詳しく述べるのでここでは割愛する。ウォートレーは任期半ばにしてイギリスに帰国し、また時の権力者ロバート・ウォルポール¹⁵の庇護も失ってしまった。こうなると、もうその政治的キャリアも終わりである。メアリーとウォートレー、2人の関係も、もはや修復できないほどの状態となった。

そんな中で、メアリーはセント・ジェームス宮殿に出入りするとともに、オスマン帝国で知った天然痘のワクチン接種を広めようと努めた。自分も若い頃天然痘にかかった経験もあり、弟もまた天然痘で死去していたこともあって、大変熱心に活動したようである。1720年、オスマン帝国滞在中に生まれた娘¹⁶に公衆の面前で種痘させ、メアリーと親しくしていたウェールズ皇太子妃¹⁷も、1722年に自分の子供に種痘を行う。当時のイギリスでは種痘は考えられないことで、イギリス全土に大変な論争が巻き起こった。が、メアリーの死後になってようやく種痘の意義が認められ、メアリーはその紹介者としてリッチフィールド大聖堂に記念碑まで建てられるに至った。

メアリーは種痘に関して各界からの攻撃を受ける一方、1728年の父の死、息子の素行の悪さ、長いこと外国生活を余儀なくされている妹フランセス¹⁸などのことを思い悩む。さらに、ずっと親しくしていたアレクサンダー・ポープの求愛を拒んだことにもより、1733年頃からはポープからのペンによる攻撃も加わって、メアリーの評判は落ちていった。親しい友人はあったが、多くの友人たちがメアリーから離れていき、メアリーの率直な物言いや行動までもが、皆から非難される場所となったのである。

3) 後半生

まさにそんなつらい思いをしていた時、1736年、1人の若いイタリア人フランチェスコ・アルガロッチィ¹⁹が登場する。彼はボローニャ大学で自然科学を研究しており、イギリスへ研究のためにやってきたのである。メアリーはアルガロッチィに恋をして、彼がイタリアに帰ってしまうと、1739年、自分も転地

¹⁵ Robert Walpole (1676-1745)イギリス史上初の首相。長く政権を維持し、平和的外交を行った。

¹⁶ Mary(1718-94) 後にイギリス首相となったピュート伯(John Stuart, 1713-92)と結婚。

¹⁷ Wilhelmina Caroline of Ansbach 後のジョージ2世(在位1727-60)妃。

¹⁸ Frances, (Countess of Mar, 1690-1761)マー伯爵(John Erskine, 1675-1732)の妻。マー伯はハノーヴァー派に反旗を翻しており、1715年には決起するが、失敗し、その後妻のフランセス共々大陸とイギリスを行ったり来たりの生活を余儀なくされた。

¹⁹ Francesco Algarotti (1712-64) イタリアの自然科学者・文筆家。

療養を理由にイタリアへと旅立つ。メアリーはこの時 50 歳であった。ところが、メアリーとアルガロッチィは 1741 年までお互いに会うこともなく、2 ヶ月を一緒に過ごしただけで、また別れてしまう。その後も、同じイタリアにしながら 2 人が会ったのは、わずか 2 回だけであった。どうやら、メアリーのイタリアへの旅は、アルガロッチィのためだけではなかったようである。イギリスでは、彼女にはあまりにも嫌なことが多すぎた。旅は、そこからの解放を意味していたのである。

ところが、異国の地でも、同国イギリス人との付き合いは避けられず、メアリーはゴシップや中傷に悩み続けた。そのため、1 つの場所にいくらく、またイギリスに帰ることもなく、20 年にもわたってイタリア各地、フランスを転々とする。この間、異国の地で暮らす寂しさを紛らわせるためにも、メアリーはペンを取り、日記や手紙を書き残した。娘には、愛情深い手紙を送り、孫娘の教育などについて論じたり、自分の寂しさを訴えたりしている。また、夫のウォートレーとも頻りにやりとりした様子が見られるが、ウォートレーがフランスへ来た際にも、2 人が会うことはなかった²⁰。

1761 年、メアリーはイタリアで夫ウォートレーの訃報を受け取る。結局、イギリスを出てから、2 人は 1 度も会わなかったことになる。同年 9 月、メアリーはイギリスへ向かう旅に出た。途中ロッテルダムで、女中の病気のために足止めを食うも、翌 1672 年 1 月、メアリーは 23 年ぶりにイギリスの地を踏んだ。娘ビュート夫人の計らいで、ロンドンで生活を始めるが、もはや友人のいないロンドンなどメアリーにとって何の魅力のなかつた。そこで、ヴェネツィアに戻りたいという意欲を見せてはいたが、同年 8 月 21 日、73 歳で癌のためその生涯を閉じる。

4) イギリス文学史上の評価・研究史

メアリー・ウォートレー・モンターグという女性は、イギリスでは、どのように見られてきたのだろうか。メアリーの生きた時代、主に 18 世紀前半は、イギリス文学史上、理性の時代と言われた。風刺文学がもてはやされ、前出のアディソン、ポープなどの文人たちが、コーヒーハウスに出入りしては、そこで古典文学の批評を論じていたのである。メアリー自身も、新聞等に寄稿したり、詩の翻訳を行ったりしていたが、後年、文壇において力を持っていたポープから激しい批判を浴びることで、その文学活動にもとても大きな影響があったと考えられる。また、公衆の面前で娘に天然痘の予防接種をさせるなど、目

²⁰ メアリーがヨーロッパを転々としていた頃の様子については、Halsband, *op. cit.*, vol2, vol3 の大部分と Grundy, *op. cit.*, pp. 247-431. から伺い知ることができる。

立った行動のため、その作品というよりは、メアリー自身が世間から良く見られなかったようであった。

メアリーは、18世紀初期に生きた女性としては大変珍しく、自分の書いた日記等を、出版しようという気持ちを持っていた。中でも、オスマン帝国への旅について書いた『トルコ書簡集』に関しては、生前から出版を強く希望しており、書き送ったもののメモを作ったり、そのメモを元に手紙を書き直したりして編集していたようである。1761年、メアリーは死を予期してか、その『トルコ書簡集』の原稿を、旅の途中のロツテルダムにおいて州知事 Benjamin Sowden 氏に預けたのである。

メアリーの死を知った Sowden 氏は、メアリーが手紙を出版したがっていること、自分が原稿を預かっていることを娘のビュート夫人に伝えた。ところが、ビュート夫妻は噂になるのを恐れ、手紙の出版を拒否したのである。彼らは Sowden 氏と交渉し、ついにその手紙を買い取り、隠してしまった。ところが、ビュート夫妻の思惑はずれて、翌 1763 年、手紙は The London Chronicle 誌へ掲載されてしまう。実は、ビュート夫人が買い取る前に、他のイギリス人が持ち出し、複製が作られていたのであった。このようにして、メアリーがいつかは出版したいと望んでいた、『トルコ書簡集』は世に出たのである。ただ、ビュート夫妻は、ゴシップになるのを恐れ、メアリーの残した日記の大部分（1712年から62年のもの）や、夫ウォートレーに送った手紙の約半分を焼き捨ててしまったというから、大変残念なことである。

その後、『トルコ書簡集』は大変な評判となり、各界からも絶賛を浴び、19世紀・20世紀になっても何度も再版を重ねることとなった。再版のたびに、残っている手紙や書き物の中から新たなものが付け加えられ、その他のメアリーの作品も読まれるようになったのである。中でも、メアリーの死後約 200 年後の 1965 年に出版された、Richard Halsband の *The Complete Letters of Mary Wortley Montagu* には、メアリーの残したあらゆる手紙のやりとりや、手紙のメモ、出版の歴史がすべて掲載されており、まさに完全版である。生涯にわたって数多く書いたこれらの手紙には、18世紀社会の事細かな記述が、大変立派な文章で表れている。

手紙以外の作品には、詩・女性の問題について書いた論文もあり、フェミニスト的な面も評価されているようだ。しかし、メアリーのあらゆる著作の中で 1 番有名な作品が、この『トルコ書簡集』である。R.Halsband による手紙の完全版が出版された後にも、さらに、最近では本論で主に参照した Dervla Murphy の *Embassy to Constantinople: The Travels of Lady Mary Wortley Montagu* や、Jack Malcolm, *Lady Mary Wortley Montagu: The Turkish Embassy Letters*、Isobel Grundy, *Lady Mary Wortley Montagu: Selected*

Letters などが出版されている。

前述したように、本論では、こうした研究史を踏まえた上で、『トルコ書簡集』の中でも、特にオスマン帝国に関する部分を取り出し、検証してみたい。イギリス文学者としてのメアリー・ウォートレー・モンターグではなく、1人のイギリス人女性が見た、オスマン帝国の様子を浮き彫りにすることがその目的である。

第2章 18世紀初頭の社会におけるオスマン帝国への旅

1) オスマン帝国とヨーロッパの関係²¹

メアリー・ウォートレー・モンターグの生まれた1689年、オスマン帝国は、ヨーロッパとの対戦関係にあった。1683年のオスマン帝国による第二次ウィーン包囲でオスマン帝国は敗退、それをきっかけにして、キリスト教諸国の神聖同盟軍がオスマン帝国側に激しい攻撃をしかけてきたのである。オスマン帝国側には、もはや第一次ウィーン包囲の時のように、ヨーロッパを脅かすような勢いがなかった。メフメット4世、続くスレイマン2世は何とか事態の收拾に努めようとしたが、その後長い間決着はつかない。ついに1699年、オーストリア・ヴェネツィア・ポーランドとオスマン帝国の間に、カルロヴィッツ講和条約が結ばれる。これは、1697年頃からイギリスやオランダの仲介によってやっと始まった和平交渉が、実を結んだ結果である。しかし、カルロヴィッツ条約は、オスマン帝国にとっては初めての非常に不利な条約であった。オスマン帝国は、これまで征服してきた領土を、ヨーロッパ諸国に割譲することになる。オスマン帝国にとっては、初の領土的後退であった。そのような不利な条件を呑まねばならないということは、強大なオスマン帝国が衰退し始めているのを示していた。

カルロヴィッツ条約後、オスマン帝国は、スペイン継承戦争(1701-14年)や北方戦争(1700-21年)においては中立の立場を守っていた。しかし、1711年、ロシアのピョートル1世の侵攻に対しては反撃し、オスマン帝国側に有利な条件で講和条約を結ぶことに成功した。その後1714年には、オスマン艦隊に海賊行為を行っているとの理由で、ヴェネツィアに攻撃を与え、そのまま戦争状態へと突入する。イギリス・オランダは、それぞれの思惑からヴェネツィアとオスマン帝国の仲介役をつとめ、1718年にはパッサロヴィッツ講和条約と

²¹ 主に三橋富治男『オスマン・トルコ史論』吉川弘文館、1966年、305 - 308頁。および、新井政美『トルコ近現代史』みすず書房、2001年、12 - 15頁。

いう形で決着がついた。その条約により、オスマン帝国はさらに領土を失い、強大な国が傾いていることが誰の目にも明らかになったのである。

2) ラーレ・デヴリ (チューリップ時代)²²

18世紀のオスマン帝国初頭を、ラーレ・デヴリ (lale devri, チューリップ時代)と呼ぶことがある。およそ、1718年のパッサロヴィッツ講和条約に始まり、1730年のパトロナ・ハリルの反乱²³までの年月を指しており、人々がチューリップや華やかな文化を愛好したことから、このように呼ばれている。アフメット3世 (在位 1704-30)のもと、大宰相のイブラヒム・パシャは対外的には融和政策を行い、対内的には文化振興を尽くした。ヨーロッパ諸国との対決はできるだけ避け、その代わりに西洋の実態を観察し、取り入れていこうという試みが見られた。オスマン帝国は、カルロヴィッツ条約や続くパッサロヴィッツ条約により、オスマン帝国の力がもはや強大ではなく、西洋の体制に見られる優位点を認めざるを得なかったのであろう。

ラーレ・デヴリにおいて大宰相を務めたイブラヒム・パシャは、時のスルタン・アフメット3世と同様、自らも詩を書き、芸術をこよなく愛していた。イスタンブールには西洋趣味が広がり、宮廷の人々は花や音楽、詩など華やかな世界に遊んだ。有力者たちは、街のあちこちに豪華な離宮を建設し、人々の目を楽しませたという。イブラヒム・パシャは自らパトロンとなり、詩人や画家を保護したのである。彼は、これまでの武人政治家とは異なり、完全な文人で、ヨーロッパ諸国にも数多くの使節を派遣、西洋の新しい要素を受け入れることで、オスマン帝国の復活を目指した人物であった。

3) メアリーのオスマン帝国への旅

さて、オスマン帝国とオーストリアの対戦中に生まれたメアリーが、オスマン帝国へ旅をした 1716 - 1718 年は、まさに前述した平和的で華やかなラーレ・デヴリの入り口だったのである。では、なぜメアリーがオスマン帝国へやってくるに至ったのか²⁴。メアリーの生涯の部分でも触れたように、もちろん 1716 年、夫エドワード・ウォートレー・モンターグがオスマン帝国大使に任命されたからである。ではその外交的役割はというと、戦争状態にあったオスマ

²² 三橋、『前掲書』、314 - 318 頁。

²³ 元イエニチェリのパトロナ・ハリルが引き起こした反乱。ラーレ・デヴリの華やかな生活は、同時にオスマン帝国に財政の逼迫状態をもたらし、この反乱は圧制に苦しんだ人々の支持を得た。結局、組織的にまとまりを持たない反乱であったため、2ヶ月足らずで鎮圧されるに至ったが、アフメット3世の退位によりラーレ・デヴリは終わりを告げた。

²⁴ Malcolm, *op. cit.*, pp. 15-18. または Murphy, *op. cit.*, pp. 24-41, 200-201. による。

ン帝国とヴェネツィアの休戦を進めるためであった。この戦争では、強大な国家であるオーストリアがヴェネツィアの側につき、オスマン帝国と戦っていた。しかし、イギリスが、当時地中海世界で力を持っていたスペイン艦隊に対抗するためには、同盟国でもあるオーストリアの協力が不可欠である。オーストリアがヴェネツィア援助に力を入れていたのでは、イギリスにとって何の利にもならなかったのである。そこで、ヴェネツィア・オーストリアとオスマン帝を和解させるべく、大使を派遣し和平交渉を進めようとしたのである。ウォートレーはその任務を負って、オーストリアを經由して、オスマン帝国へと旅を進めることになる。

ウォートレー一行は、1716年の8月1日、ロンドンを出発し、イギリス・グレーヴセンドの港からロッテルダム行きの船で出発した。8月3日にロッテルダムに着くと、その後は陸路で神聖ローマ帝国を横切り、約1ヵ月後には皇帝の居住地、ウィーンへ到着。夫ウォートレーは、ウィーン宮廷における交渉ごとに忙しく、その間2ヶ月ほどメアリーは宮廷で華やかな社交生活を送る。11月、イギリス側からの支持を仰ぐため、ウォートレー一行はハノーヴァーへと向かった。メアリーにとって懐かしいイギリスの人々も多いハノーヴァーであったが、12月下旬には再びウィーンに戻るようになる。

翌1717年1月中旬、一行はついにオスマン帝国へ向けて出発した。この旅は、ドナウ川が凍っていたために、陸路で真冬のハンガリー平原を横切るという大変厳しいものであった。一行はブダ、ベオグラードを経て、当時オスマン帝国領であったソフィアに入る。手紙からは、途中イエニチェリの護衛を受けるもその暴虐ぶりに心を痛めているメアリー自身や、通り過ぎた町々の貧しい様子が伺える。このような困難な旅を進め、春になる頃には、一行はアドリアノーブル（エディルネ）へ到着した。その後1ヶ月ほどして、やっとオスマン帝国の中心地、コンスタンティノーブル（イスタンブール）に入り、ウォートレーはオスマン帝国との交渉を本格的に開始したのであった。

メアリーが楽しい日々を送っている間に、ウォートレーはオスマン帝国政府側と交渉を進めていた。アフメット3世は、イギリスの仲介を受ける意を伝えてはいたが、休戦の条件として、先の戦いで破壊されたテメシヴァルの町を、ヴェネツィア・オーストリア側がオスマン帝国に引き渡すことを要求した。ウォートレーは、条件つきではあったが、休戦に持ち込めそうなことに満足した。そして、自信たっぷりにその条項をウィーンへ送ったのである。これには、オーストリア・ヴェネツィアは大変腹を立てた。イギリスはオーストリアの同盟国であるのに、オスマン帝国の肩を持つとはどういうことなのか？

この状況において本国イギリスは、ウォートレーが大使としては不適格だと判断し、1717年9月ウォートレーの解任を通告したのである。こうしてウォ

ートレーは失意の中、任期 5 年のところわずか 1 年足らずで、オスマン帝国を去ることとなった。帰途は、1718 年 6 月スミルナ（現イズミル）からエーゲ海を下る船旅で、チュニスを経由してジェノヴァから陸路アルプス山脈を越え、フランス・カレーからイギリス・ドーヴァーに戻るといったものであった。メアリーは、幼い頃から本で読んでいた遺跡を目にして、大いに楽しんでいる様子である。さまざまなローマ・ギリシャ神話の引用などに、メアリーの知識の豊富さがよく表れているとも言えるだろう。この楽しくも寂しさのある船旅をもって、メアリーのオスマン帝国の旅は終わりを告げるのである。

なお、旅の前半部の行程については地図で示す。（図 2）

第 3 章 『トルコ書簡集』におけるトルコの女性たち

この章では、別冊『トルコ書簡集』を用い、メアリーの見た女性たちの生活の様子を探っていく。なお、翻訳は 1993 年ロンドン・William Pickering 出版の、Jack Malcolm, *Lady Mary Wortley Montagu: The Turkish Embassy Letters* の英文をもとにしており、手紙につけられた番号も英文テキストに拠る。

1) 女性の服飾

1 - 1 メアリーの服飾観

いつの時代においても、女性たちの関心を大いに集めるものの 1 つが、服装である。人は見た目にはよらない、などと言うものの、豪華で美しい衣装にはどうしても目がひかれる。メアリーがトルコの女性たちの、華やかな服装に目を奪われたのは、当然のことだろう。ただ、念のため付け加えておくと、メアリーは上流階級の出ではあるものの、それほど贅沢で豪華な衣装に関心を持っていたようには思われぬ。その証拠に、旅の前半、友人に次のように語っている。

「この町（ニュルンベルグ）には贅沢取締法があって、人々の階級を衣服の色でわけ、他の町をすっかりだめにしてしまった過剰な贅沢を防いでいます。そのため、よそ者から見ると、私たちの衣服よりも、ずっと好ましく見えます。正直に言って、この法律が世界の他の場所でも適用されたらなあと思うのです・・・(中略)(豪華な衣装を着たいという)誘惑に負け、若い人たちが愚かな過ちをしてしまうのはごく自然なことですし、そのうちに、どんな場合にで

も必要となるお金が足らなくなってしまうのです・・・。」²⁵

また妹フランセス(マー伯爵夫人)に宛てて、「この流行は、あなたの想像をはるかに越えて、ものの道理や常識に反した、ぞっとするようなものです。」とウィーンの服装を嘆いており²⁶、その後えんえんと「愚かな衣装」の描写が続いていくことになるのである。他の地域の衣装についても、メアリーの酷評は続く²⁷。ところが、トルコの女性たちの衣装については、メアリーはほとんど手放しで賞賛していると言っても良い。その理由は何であろうか。

その理由の1つに、18世紀初頭のヨーロッパに起こった、オリエンタリズムの影響が挙げられると考えられる。1704年、「千夜一夜物語」が初めてフランス語に翻訳され、ヨーロッパの人々に読まれるようになった。人々は異国情緒たっぷりの雰囲気酔いに酔い、東洋の文化を真似ながら、空想の東洋を作り上げていた。つまり、オリエンタリズムは、ヨーロッパ側が勝手に作り上げた東洋のイメージに過ぎなかったのである。メアリーは冷静な観察者ではあったものの、東洋風のものを受け入れる土台ができていた、とも考えられるのではないか。こうしてメアリーは、自らがトルコ風の衣装を身に付け、イギリスにも持って帰ることとなるのである。なお、メアリーの帰国後、オリエンタリズムはさらなる高まりを見せ、18世紀の後半に『トルコ書簡集』が出版される頃になると、トルコ風の衣装は大流行することとなった²⁸。

1 - 2 衣装の概要

17世紀後半から18世紀初めにかけて、オスマン帝国側にも、いたるところでヨーロッパの影響が見られた。衣装においても、フランスから輸入された織物などが用いられ、それまでの時代とは異なったディテールが現れる。服装全体に柔らかな感じのものが多くなり、女性らしく優雅な雰囲気を漂わせるものが流行したようだ。その様子は、1720-30年の間宮廷画家を務めたレヴニーの美しい絵画によって、垣間見ることができる。また、女性たちにとっては、美しく豪華な衣装は社会的な地位を表すものでもあり、できるだけ素晴らしいものにと、誰もが熱心に着飾っていたのである。(図3・4)

メアリーは、トルコ風の衣装を大いに気に入っており、自ら衣装を着用して(図1)、妹マー夫人宛の手紙の中で、衣装の様子を順番に説明している。

²⁵ 別冊『トルコ書簡集』5-6頁、手紙5(1716年8月22日プリストル夫人宛/ニュルンベルグ)

²⁶ 別冊『トルコ書簡集』12頁、手紙9(1716年9月14日マー夫人宛/ウィーン)

²⁷ 同、23頁、手紙14(1716年11月17日マー夫人宛/プラハ)ウィーンの衣装よりもひどい、プラハの衣装についての批判。

²⁸ アレヴ・リトル・クルーティエ、篠原勝訳『ハーレム：ヴェールに隠された世界』河出書房新社、1991年、173-180頁。

「(ズボン)とても長く、足先に届くほどです。私たちのペチコートよりも長く、完璧にきれいに足を隠してくれます。色は薔薇色、薄いダマスク織りで、銀色の花が刺繍されているものです。・・・(中略)・・・上着は、縁を刺繍した、美しい白い絹の薄い織物です。袖は、幅が広く、腕の半分くらいの長さほどに垂れ下がっています。そして、襟元は、ダイヤモンドのボタンで留めるようになっています。でも、胸元がきれいに見えるように、工夫されています。」²⁹

ズボンの上には、ギョムレッキ (gömlek) と呼ばれる上衣を身に付けることが多かった。これは比較的ゆったりとしたもので、シルクや上質のコットンで作られていた。ギョムレッキの上に羽織るものとしては、エンターリ (entari) と呼ばれるベストがある。上流階級の人々が身につけるエンターリは、季節によっても異なるが、ベルベットやシルクでできているのが常であった。それほど身分の高くない者たちは、コットンや安いシルクのものを用いたという。この頃のエンターリは、かかとまで届くほどの長さで、身体に合った細身のものが主流だった。衣装の流行はこのエンターリに顕著に表れており、特にこの時代のものは大変優雅で上品な趣がある³⁰。メアリーが着ていたエンターリは、手紙の記述によると「白と金のダマスク織り」で「ダイヤモンドや真珠のボタン」で留めるようになっていたようだ。

ギョムレッキ、エンターリの上からは、カフタン (kaftan) やダラマン (dalaman) を羽織る。どちらも丈が長く、袖が大変ゆったりとしているが、ダラマンの袖はカフタン以上に長くたっぷりととってあった。そして、どちらにも豪華な帯を結んでいたようである。帯は、それほど幅広の帯ではなく、指4本分ほどの幅である。ダイヤモンドや真珠などの宝石が散りばめられており、留め金もたいていはダイヤモンドであった。それほど豪華ではない帯の場合にも、サテン生地などで大変精巧な金銀の刺繍が施されていたようである。メアリーは、侍従長夫人のファトマを訪れた際、彼女の着ていたカフタンの美しさを次のように表現している。

「(ファトマ)銀の花飾りのついた、金のしゅす織りのカフタンを身にまわっていました。このカフタンは、体にぴったりと良くあって、胸のあたりを大変美しく見せていました。ファトマが動くたびに、胸元に薄い織物で陰影ができるのです。・・・(中略)・・・幅広の帯にもまた、ダイヤモンドが散りばめてありました。」³¹

他に、季節によって脱いだり着たりするものに、ジュッペ (cüppe) という

²⁹ 別冊『トルコ書簡集』56 - 57 頁、手紙 30 (1717 年 1 日マー夫人宛 / アドリアノーブル)

³⁰ Jennifer Scarce, *Women's Costume of the Near and Middle East*, London: Unwin Hyman, 1987, pp. 55-65.

³¹ 別冊『トルコ書簡集』74 頁、手紙 34 (1717 年 4 月 18 日マー夫人宛 / アドリアノーブル)

厚手の上着があった。これは多くの場合豪華な錦織で、クロテンやイタチの毛皮で縁飾りがつけられていたという。そして、最後の仕上げに、ベルベットの刺繍入りの美しい上靴をはいて、出来上がりである。

1 - 3 装飾品

「アクセサリーとして、ハフサ夫人はその首に、膝まで届くほど長い3連のネックレスをかけていました。そのネックレスたるや、中心に、ちょうど七面鳥の卵くらいの大きさをしたエメラルドがあり、その下にもっと大きな真珠、まわりには200個ものエメラルドがつながっている、という豪華さ。エメラルドはどれも美しい緑色で、ちょうどクラウン銀貨の半分くらいの大きさ、厚さは銀貨3枚分ほどもあったのです。さらに、一番素晴らしいのは、彼女のイヤリングでした。なんと、洋なしのような形をした、ハシバミの実くらいの大きさがあるダイヤモンドなのです・・・(中略)・・・腕にダイヤモンドのブレスレット、指には5つのダイヤモンドの指輪をつけていました。トーマス・ピット³²のあの巨大なダイヤモンドを除けば、私が見た最大のダイヤモンドだと言えます。こうしたものの本当の価値を正確に計算できるのは宝石商ですが、私がおおよそ、おおまかな価値をつけるとしたら、彼女の衣装は、10万ポンドは下らないのではないかと思います。たぶん、ヨーロッパのどの国の王妃も、これほど価値のある品々を身につけてはいないでしょう・・・。」³³

メアリーは、先のスルタン・ムスタファ2世の未亡人、ハフサ夫人を訪れた際、このように述べている。実に詳細に観察している一方、初めて目にする豪華さに驚いている様子が伺える。衣装と同様、宝飾品もまた女性たちの美に華を添えるものであり、どれほど素晴らしい宝石を身につけているかに、女性たちの身分も表れた。そのため、皆競って美しい宝石を身につけようとしたのである。1番好まれたものはダイヤモンドであるが、真珠やめのう、その他色とりどりの宝石が衣装や帯、アクセサリーとして用いられていた。また、宝石に関しては女性の所有できる財産ともなっており、いざという時に売ることもできたという³⁴。

メアリーがオスマン帝国に滞在した頃、女性たちの間では、髪飾りとしての宝石が流行していたようであった。ダイヤモンドやエメラルドのヘアピンをふんだんに髪につけ、さらに宝石でできた花を飾るのである。「ルビーの薔薇、ダ

³² トーマス・ピット (Thomas Pitt, 1653-1726) 当代一の巨大なダイヤモンドの持ち主として有名であった。Malcolm, *op. cit.*, pp. 178.

³³ 別冊『トルコ書簡集』95 - 96 頁、手紙 41 (1718年3月10日マー夫人宛 / コンスタンティノーブル)

³⁴ クルーティエ、前掲書、71 - 75、161 頁。Suraiya Faruqi, *Subjects of the Sultan*, New York: I.B.Tauris Publisher, 2000, pp. 107-110.

イヤモンドのジャスミン、トパーズの水仙」などが、豊かで美しい髪にふんだんに飾られていたとメアリーは語っている。

さらに、宝石と共に女性たちを飾ったのが、ホトズ (hotoz) と呼ばれる帽子のような被り物であった。この帽子をちょっと斜めになるように頭の片側にのせ、もう片側に髪の毛を下ろし、さまざまな飾りをつけるのである。ホトズは、冬はベルベットで作られ、夏用はもっと薄い織物であった。多くの場合、ダイヤモンドなどの宝石で縁取られるか、美しい金銀の刺繍が施されたハンカチを結びつけた。このハンカチは、女性たちにとって重要な意味を持っていた。自らが、美しい刺繍を施すこともあったようである。また、美しいハンカチは贈り物として大変好まれたという³⁵。

こうしてすっかり美しく着飾った女性たちは、念入りに化粧をした。彼女たちにとって、美しさは何よりも大切だったのである。肌にはおしろいを塗り、眉毛を描き、目のまわりはアイラインでぐるりと囲む。爪は薔薇色に塗り、体中にたっぷりと香水をふりかけた。メアリーは、トルコの女性たちは並外れて美しい、と大いに感心している。それは、もちろんもとの顔の造作にもよるのだろうが、こうした華やかな衣装・装飾品の印象によるところも大きいのではないだろうか。

1 - 4 ヴェール³⁶

さて、これほどまでに美しく着飾っている女性たちではあるが、その姿を人前に現すことは少なかった。どの家でも、セラムルック (男性の居住の場) とハレムリッキ (女性の居住の場) が厳格に分けられていることもあり、女性は自分たちの空間の中でのみ、主に生活していたのである。

女性たちがハレムリッキの外に出る際には、必ずヴェールを着用し、顔や身体を覆わねばならなかった。イスラム教の教えで、男性の目から女性を守るという意味で、そのようにすることが奨励されたのである。イスラム教、その創始者であるマホメットがヴェールをどのように定義していたのか、そもそもイスラムの教えでヴェール着用は義務付けられていたのか、など疑問に残る点も多い。しかし、ここでは、少々強引だが、当時外出の際はヴェールを被っていた、という前提にして、話を進めたいと思う。特に本論で問題にしている 18 世紀頃は、男性たちの間で「見えない (控えめな) 女性」が理想像とされていたようであり、大多数がヴェールを着用していたことは想像に難くない。

³⁵ Pars Tuğlacı, *Türkiye'de Kadın*, İstanbul: Cem Yayınevi, 1985, pp. 194-195.

³⁶ ヴェールについては、主に以下の 3 冊の文献を参考にした。中西久枝『イスラムとヴェール』晃洋書房、1996 年、3 - 14 頁。Faroqhi, *op. cit.*, pp. 110-112. クルーティエ、前掲書、76 - 79 頁。

「トルコの女性たちが、私たち以上に自由であるのは、見た目にも明らかです。どんな身分の女性も、通りに出る際には、ヤシュマクと呼ばれる、二枚のモスリンを身に着けなければなりません。これは、目以外の顔を全部隠してくれます。フェラージェと呼ばれる衣服は、体をすっぽりと覆って全部見えなくするものです。どんな女性も、この布と上着なしで外出はできないのです。フェラージェの袖はまっすぐで、指先まで隠してしまうほどで、私たちの乗馬用コートとは全然違います。(冬は厚手の布で、夏は薄手のものか、もしくは絹でできたものを用います。)ご想像どおり、この服装はうまく身分を隠してくれます。身分の高い貴婦人でも奴隷であっても、たいした違いはありません。そこで、万が一通りで嫉妬深い夫が妻に出会ったとしても、自分の妻だとは分からないのです。もちろん、どんな男性も、通りで女性を追いかけたり、触れようとしたりはしませんから・・・。」³⁷

一般に、メアリーたちヨーロッパの人々から見て、後にヴェールは抑圧されている女性の象徴となっていく。が、メアリーはむしろヴェールの役割を上記のように肯定的に取り、その利点を強調している。ヴェールを被っていることで、男性たちの目を意識することなく、自由に歩き回れる、というのである。実際、このヴェールを利用して、不道德な行いをする女性もあったようであるし、メアリーの手紙からも、街歩きの際、自らトルコ風の衣装やヴェールを着用していた様子が読み取れる³⁸。オスマン帝国の領土下に住むキリスト教徒の女性たちの中には、メアリーのようにヴェールを被る者もあり、被らない者もあった。個人や地域によって差があったとは思われるが、被ることで一見キリスト教徒かどうかの区別もつかなくなるので、ある意味便利なものであったと言える。

2) 日常生活

女性たちがほとんどの時間をハレムリッキ(女性だけの居住空間)で過ごすことは、前節でも少し触れたが、その女性たちはいったいどんな人々であったのだろうか。彼女たちの生活について、残されている資料はあまり多くはない。それは、ハレムが閉ざされた世界であり、オスマン帝国側はその内貌を明らかにしようとはしてこなかったからである。そのため、メアリーのような、オスマン帝国へやってきた外国人たちの記録が大変重要となり、研究にも大いに利

³⁷ 別冊『トルコ書簡集』58頁、手紙30(1717年4月1日マー夫人宛/アドリアノーブル)

³⁸ 同、75頁、手紙35(1717年5月17日アベ・コンティ宛/アドリアノーブル)や同、105頁、手紙46(1718年4月10日プリストル夫人宛/コンスタンティノーブル)などにおいて、自分がトルコの衣装を着たことを記している。

用されているが、一方で、外国人が見られるものの限界もあるので、誤解や間違いもあることを考慮にいれなければならない³⁹。この点で、メアリーは比較的冷静な観察者に徹しており、彼女の『トルコ書簡集』は信用のおける資料と考えられている。

ハレムリックの中で、1番有名なものはトプカプ宮殿であり、そこにはスルタンの妻や子、女奴隷、宦官などが生活をしており、最盛期にはその人口は2000人にも膨れ上がったと伝えられている。ここでは、そのトプカプ宮殿の例も参考にしながら、当時の都にあった、裕福な家の数々のハレムリックの様子を探ってみたい。なお、メアリー自身はトプカプ宮殿について、主にその外観を簡単に著しているにすぎない⁴⁰。

2 - 1 主人と奴隷の関係⁴¹

20世紀に入るまでの長い間、オスマン帝国内のイスラム教徒のほとんどが、男女別々の生活をしてきた。裕福な家では、一家の主人と、そのお付きの男性たちは皆セラムルックで暮らし、女性たちはハレムリックに隔離されて過ごしていたという。ハレムリックに立ち入ることのできる男性は主人と黒人宦官だけであり、宦官は女性たちの行動を逐一管理すると共に、女性たちを外の世界から守る役割を果たしていた⁴²。イスラム教では、4人の妻を持つことが認められており、また好きなように奴隷を囲うこともできたので、裕福な屋敷の人口は、相当多かったのではないかと推測される⁴³。

メアリーは、書簡集の記録に残る限り、1717年当時大宰相であったハリット・パシャ夫人や、女性の衣装の節でも言及した、スルタン侍従長夫人のファトマ、前スルタン・ムスタファ2世妃ハフサ夫人のハレムを訪れている。中でもメアリーが1番感銘を受けたのは、スルタン侍従長夫人ファトマのハレムであった。

「門のところで、2人の黒人宦官が私を出迎えると、長い回廊を案内して進んでいきました。そこには、かわいらしい少女たちが2列に並んでいましたが、皆足まで届くほどの長い髪の毛を編み、薄地の銀色の紋織りとダマスク織りの、美しい衣装を着ていました。礼儀上、立ち止まって眺めることができず、私は

³⁹ Leslie P. Pierce, *The Imperial Harem*, New York, Oxford University Press, 1993, pp. 113-114.

⁴⁰ 別冊『トルコ書簡集』105 - 106頁、手紙46(1718年4月10日ブリストル夫人宛/コンスタンティノーブル)トプカプ宮殿についての言及。

⁴¹ 主に、クルーティエ、前掲書、30 - 33頁。及び Pars Tuğlacı, *op. cit.*, pp. 137-152. を参照した。

⁴² クルーティエ、前掲書、36 - 37頁。及び Pars Tuğlacı, *op. cit.*, pp. 21-23.

⁴³ クルーティエ、前掲書、24 - 30頁。及び Pars Tuğlacı, *op. cit.*, pp. 56-58.

非常に残念に思ったのです・・・(中略)・・・ファトマの美しい女奴隷たちがずらりと列をなしている様子は、私には、まるで神話に出てくるニンフたちのように思われました。きっとこれほど美しい光景は、めったに見られるものではないでしょう。」⁴⁴

女奴隷たちは、ファトマの命によって楽器を演奏し、踊りを踊ってみせる。また、コーヒーを差し出したり、香を焚いたりと女主人に仕えているのであった。メアリーは、奴隷女たちは皆大変に美しく、教育が行き届いていたと感心している。実際、これらの奴隷女たちは、幼い頃から教育を十分に受けて育っているのである。メアリーは、ハフサ夫人のハレムにも何十人もの女奴隷がいたと記している⁴⁵が、中には7歳にも満たないかわいらしい少女を10人ほど目にしたようである。

奴隷は、主人の自由で売り買いされたり、贈られたりしていた。しかし、奴隷市場で公に売られるのは、何か罪を犯した奴隷であったり、性格や外見に悪い点が見られたりした奴隷のみであったようである。また、戦争や遠征などの際に捕虜にした若い女性や、子供の中で容姿が美しいものは、有力者やスルタンのもとへ献上されたという。そこで必要な礼儀作法や知識を教え込まれ、中には有力者やスルタンの妻となる者も少なくはなかったのである。ファトマもまた、メアリーに、自分の母がポーランドから連れてこられた女奴隷であったことを語っている⁴⁶。

ヨーロッパ人にとって、奴隷貿易は野蛮なものでもあり、また大きな興味の対象でもあった。イギリスのメアリーの友人たちも、手紙で奴隷のことをずいぶん尋ねているようである。メアリーのほうもそれに答えてユーモアを交えた返事を書いているので、メアリーの言葉でこの節を終わりにしたい。

「あなたのお手紙に書かれていた私への願い事、失礼を承知で申し上げますが、あれには思わず笑ってしまいました。私に、あらゆる美德を備えたギリシャ人の奴隷を買ってきてほしい、などとおっしゃるのですから。ギリシャ人は、オスマン帝国の従属者ではありますが、奴隷ではないのです。奴隷として売り買いされているのは、戦争で捕虜になった者や、ロシア、コーカサス⁴⁷、グルジアなどから連れて来られる、タタール人が主です。大変貧しく惨めな様子をしていますから、たぶんお宅の召使にはふさわしくないでしょう・・・(中略)・・・身分の高い人々に仕える美しい奴隷娘たちは、8、9歳の頃に買ってこられて、

⁴⁴ 別冊『トルコ書簡集』72 - 74 頁、手紙 34 (1717 年 4 月マー夫人宛 / アドリアノーブル)

⁴⁵ 別冊『トルコ書簡集』98 頁、手紙 41 (1718 年 3 月 10 日マー夫人宛 / コンスタンティノーブル)、ハフサ夫人を訪問した際の記述。

⁴⁶ 同、99 頁、手紙 41、ファトマがまるでトルコ人のように見えない、とメアリーのお付きが語ったのを受けての答え。

⁴⁷ ロシアの黒海沿岸の地方。

歌や踊り、刺繍などを丁寧に教え込まれて、立派な教養を身に付けているのです。多くはコーカサス地方の者です。こういった奴隷娘を有する主人は、何かよほど悪いことをしたのでもない限り、めったに自分の奴隷を売りません…。

」⁴⁸

「私は奴隷を扱う時のトルコ人の人間性に、大いに感心したと正直にお伝えしましょう。トルコ人たちは奴隷をひどく扱うことはありませんし、世界中で行われている強制的な労働のほうが、よっぽどひどいと思います。奴隷のお給金がない、というのは事実ですが、奴隷たちには、私たちが召使に払うお給金よりずっと価値のある衣服が、毎年与えられているのです…。」⁴⁹

2 - 2 住まい

当時、どんなトルコ人の住居でも、女性と男性の住み分けがなされていた⁵⁰。最も貧しいものはカーテンで仕切るなどして、同じ空間を共有しないようにしていたという。最大のハレム、トプカプ宮殿では、クシュハーネというハレムと外の世界をつなぐ接点があり、外界との接触はすべてここで遮られていたのである。メアリーの滞在していたような、裕福な屋敷となると、セラムルックとハレムリッキは、同じ敷地内に全く独立した2つの建物のように建てられた。メアリーはその様子を、次のように説明している。

「…家の1つ目の部分は、その家の主人のものです。そして、もう1つの部分は、いわゆるハレムと呼ばれる女性たちの場所となっています。ハレムにも、庭を囲む回廊があり、庭のほうに向かって窓がぐるりといついています。そして、主人の部屋と同じようにたくさんの部屋が並んでいますが、非常に華やかで、さまざまに飾られています。2段目の窓はとても低くて、ちょうど修道院のように格子がはめてあります。」⁵¹

女性の外出が制限されていたこともあり、ハレムは女性たちが快適に過ごせるよう、男性の居住空間よりもずっと凝った装飾がなされていた。装飾品としては、床一面の高価なペルシャ絨毯、ゆったりとしたソファー、金銀刺繍入りの美しいクッションなどが置かれるのが常であったようである。また、花や美しい香水びんなどもあちこちに飾られた。メアリーが「修道院のような格子」と表現したのは、おそらくカフェス(kafes)のことであろう。女性たちの姿が

⁴⁸ 別冊『トルコ書簡集』86頁、手紙38(1717年6月17日宛先匿名/避暑地)

⁴⁹ 別冊『トルコ書簡集』108頁、手紙46(1718年4月プリストル夫人宛/コンスタンティノープル)

⁵⁰ 民間の住宅の建築様式については、次の文献を参考にした。山本達也『トルコの民家』、丸善、1991年。

⁵¹ 別冊『トルコ書簡集』69頁、手紙33(1717年4月1日アン・ティスレスウエイト宛/アドリアノーブル)

外から見えない、同時に女性たちが気兼ねなく外を眺められる、という利点を持っていたのである。

女性たちが外の空気を楽しむために、屋敷に作られていたのが庭園であった。自由に外に出られない女性たちにとって、庭園は重要な役割を持つものである。メアリーは、その手紙の中で、さまざまな庭園の様子や、トルコ人がいかにそういったものを愛しているか、どれほど大切な存在であるのかを、折に触れて語っている⁵²。たいていハレムの庭園は、外から見えないように高い壁で囲まれ、また背の高い糸杉の木などがぐるりと植えられた。バラ・ジャスミン・すいかずらのような花々と噴水、真ん中には心地よいあずまや(köşk)。女性たちは、暖かい日には庭で散歩をしたり、お菓子を食べたり、また歌ったり楽器を演奏して大いに楽しんだのである⁵³。

住まいのことにに関して、季節による違いについて付け加えておきたい。夏は涼しく、冬は暖かく、というのは当たり前であるが、そのために、夏用の住宅にはタイルや噴水などが多く用いられ、少しでも涼しげな様子を演出することに注意が払われた。裕福な家族は、街の中心から離れ、郊外へ避暑に出かけることもあったようで、メアリーも1717年の夏は、避暑地の村で過ごしている⁵⁴。冬には、暖を取るために、トルコ独特の暖房器具が用いられた。メアリーは寒いイギリス出身であるためか、各国の暖房には大変興味を持っている様子である。

「・・・タンドゥール(炬燵)は、煙突のあるストーブとは形が違って、2フィートほどの高さ、机のような形をしていますし、机と同じ木でできています。そして、表面を美しいカーペットや布で覆っているのです。タンドゥールの中には、熱い石炭が少し置かれて、その上をすっぽり覆った布の下に人々は足をいれ、暖を取っています。この机で、皆仕事をしたり本を読んだりして、時にはうとうとと眠りに落ちることもあるのでしょうか。眠り込んで夢でも見ていたのか、熱い石炭の入った入れ物を蹴飛ばしてしまい、そのせいで家が火事になってしまうこともよくあるようです・・・。」⁵⁵

続けて、メアリーはトルコ人たちがこのような火事に慣れっこになっている、と嘆かわしそうな、しかしどこか面白がっているような口調で語っている。おそらく、メアリーはこの日本の炬燵のようなタンドゥールには、ウィーンの暖

⁵² 『トルコ書簡集』には主に以下の手紙で、庭園の記述が見られる。別冊『トルコ書簡集』60頁、手紙31。同、70頁、手紙33。同、117-118頁、手紙49。

⁵³ クルーティエ、前掲書、46頁。

⁵⁴ 別冊『トルコ書簡集』85-88頁、手紙37と手紙38はどちらもベオグラード近郊の避暑地から書かれている。

⁵⁵ 同、89-90頁、手紙39(1718年1月4日アン・ティスレスウエイト宛/コンスタンティノーブル)

房器具（イギリスにもって帰りたいほどだ、と手紙の中でその素晴らしさを絶賛している⁵⁶。）ほどに良い印象は抱かなかつたらしい。しかし、トルコ人たちにとっては実に快適な暖房だったのである。

2 - 3 食事⁵⁷

イギリスからやって来たメアリーにとって、トルコ料理は大変変わったものに見えたのではないだろうか。現代でこそ、トルコ料理はヨーロッパの各地で見られるようになったが、当時その実態は明らかでなかったに違いない。メアリーが初めてトルコ料理を口にしたのは、おそらくベオグラードだと思われる。ベオグラードで、メアリーたちイギリス大使一行は、将軍アフメッド・ベイの邸宅に滞在し、食事を共にしたのであった⁵⁸。メアリーはトルコ料理を気に入ったようであったが、3週間ほど毎日のように食べていると、だんだん飽きてくると語っている⁵⁹。中でも、おそらく1番印象に残ったのは、アフメッド・ベイがワインを飲んだことであつたらしい。イスラム教では、禁酒が義務付けられているのが、周知の事実だからである。何故飲むのですか、というメアリーの率直な質問と、アフメッド・ベイのやりとりは、手紙の中で2度にわたって語られている。

「・・・するとアフメッド・ベイは、神の創造物はすべて良いものであり、人間が利用できるように作られているからだ、と答えました。しかしですね、とアフメッド・ベイは続けます。『飲酒を禁じるのは、大変に立派な教えです。特に、節度を越えることもある一般の人々にとっては。ですが、預言者は、自制心を持つ者までを規制するおつもりなどないはずです・・・。』」⁶⁰

「私がその話題を持ち出しますと、アフメッド・ベイは笑ってこう言いました。『この世の創造物は、すべて神が人間のためにお造りになったものなのですから、ぶどう酒を飲むことが罪ならば、神はぶどうをお造りにならなかったでしょう?』と。』」⁶¹

具体的な料理について、メアリーはハフサ夫人のもとを訪れた時、50皿もの

⁵⁶同、30頁、手紙19（1716年12月17日マー夫人宛／ブランケンブルグ）この地方の暖房設備がいかに良いものかについて述べている。

⁵⁷トルコ料理については、主に鈴木董『食はイスタンブルにあり』NTT出版、1995年を参考にした。

⁵⁸別冊『トルコ書簡集』42 - 43頁、手紙24（1717年2月12日アレクサンダー・ポープ宛／ベオグラード）で、アフメッド・ベイの邸宅に滞在していることを告げている。

⁵⁹同、72頁、手紙34（1718年4月18日マー夫人宛／アドリアノーブル）トルコ料理の味について述べている。

⁶⁰同、51頁、手紙28（1717年4月1日アベ・コンティ宛／アドリアノーブル）

⁶¹同、92頁、手紙40（1718年2月アベ・コンティ宛／コンスタンティノーブル）

肉料理が出されると述べている⁶²。人々の好んだ羊肉や鶏肉などは、当時の物価を考えると、高価なものであったらしい。それを 50 皿も出せるということで、ムスタファ 2 世の未亡人であるハフサ夫人がどれほど豊かな生活をしていたか、想像することができる。また、肉料理は祝祭やご馳走に欠かせないものである。ハフサ夫人の、イギリス大使夫人メアリーを大いにもてなそうとする気持ちが、この 50 皿の肉料理にも表れていると言えるだろう。料理は、「イギリスのシチューのような煮込み料理」が多かった、とのことだが、これはおそらく、現在のトルコ料理ではほとんど見られない、ヤフニーというアラブ式シチューのことであると推測される。また、料理には、果物のシロップに甘みをつけた、シェルベット（シロップ水）が一緒に出されたという。

肝心のお味のほうは、相当香辛料をきかせた、味の濃いものであったようだ。オスマン帝国には、地中海地方やはるか東南アジアからも、多様な香辛料がもたらされていたのである。コーヒーもまた、そのようにしてオスマン帝国で広く飲まれるようになったというが、習慣として広まったのは比較的新しく、15 世紀くらいからであったという。なお、メアリーの時代、トルコにはまだお茶を飲む習慣がなかったのもてなしの最後には、甘いものの後に必ずどろっとしたトルココーヒーが添えられた⁶³。

トルコ料理はメインディッシュからデザートまで種類も多く、味もさまざまであるが、メアリーはその手紙の中であまり多くを語っていない。この書簡集全体を通して、料理の味や種類を詳細に説明していないのである。しかし、1 つだけ食事に関して、実に細々と述べている部分がある。それは、前出のハフサ夫人のもとにお食事に出かけた際、50 皿もの肉料理が供された様子である。おそらく、食べ物そのものより、そのきらびやかなサービスのほうに目が引かれたのであろう。美しいもの、豪華なものに敏感に反応するメアリーの様子が伺える一節であると思うので、最後に手紙のその部分を引用したい。

「・・・ナイフは全部、柄にダイヤモンドがついた金でした。中でも、あまりに豪華すぎて、私が残念に思ったものがあります。それはナプキンとテーブルクロスでした。どちらも、金の刺繍入りで、薄い絹でできているのです・・・（中略）・・・シロップ水が、陶器に入って出されました。その陶器の入れ物も、ふた、お盆も全部ずっしりと重い金なのです。食事が終わると、金のたらいに入った水と、また同じような美しいナプキンが運ばれてきました。私は大変嫌々ながらも、そのナプキンで手を拭きました。最後の締めくくりは、金の受け皿

⁶²同、96 頁、手紙 41（1718 年 3 月 10 日マー夫人宛ノアドリアノーブル）

⁶³ 別冊『トルコ書簡集』72 頁、手紙 34（1717 年 4 月 18 日マー夫人宛アドリアノーブル）、96 頁、手紙 41（1718 年 3 月 10 日マー夫人宛コンスタンティノーブル）において、食事の流れを説明。図 5 参照。

つきの陶器で出される、おいしいコーヒーでした……。」⁶⁴

4 - 4 娯楽

女性たちにとって、最もお手軽な娯楽は、音楽であった⁶⁵。前述のように、庭を散歩したりするのも楽しみであったが、そこで歌ったり踊ったりするのも、非常に大きな楽しみだったのである。また、教養として、音楽と踊りを身に付けるのが女性として必要なこととされ、ハレムに暮らす奴隷女たちは、歌や踊りで主人の気をひこうともしたのである。トプカプ宮殿には、女性だけの楽団や舞踊団すら作られていたという。

イエニチェリたちに護衛をうけて旅をしてきたメアリーでもあるから、おそらくアドリアノーブルやコンスタンティノーブルに入る前に、トルコの軍隊音楽や簡単な歌などは耳にしていたと思われるが、詳しい記述は見当たらない。アドリアノーブルにやってきて初めて、地元の人が吹いている笛の音が非常に美しかった⁶⁶、と語っている。これだけでは何の笛であるか分からないものの、伝統的な楽器としてはネイ(ney)と呼ばれるたて笛があった。笛については、後にメアリーが、メヴラーナと思われる修道院を見学にいった際にも、いくらか述べられている⁶⁷。その他の楽器として、ファトマのもとで見た「リュートとギターの中間のような楽器」の話⁶⁸が表れているが、これはおそらくタンブールという、現在のサズ(トルコ独自の、三味線のような楽器)の祖先にあたるものと思われる。古い楽器については、非常に分かりにくいので、いくつかを図で示すこととする。(図6 - 8)

音楽が流れれば、必ず踊りも音楽に従って行われた。トプカプ宮殿のハレムの舞踊団は、12人一組となり、スルタンの前などで優雅な踊りを見せたという。メアリーは何度かこうした踊りを目にしたが、侍従長夫人ファトマの奴隷たちの踊りには大変感銘を受けたようだ。当然のことながら、洗練されたファトマのもとには、素晴らしい踊りのできる女奴隷もいたのである。(図9)

「……残りの者たちは、踊りを踊ったのでした。この踊りは、私が今までみた、どんな踊りとも違っていました。これほど芸術的で、感動をもたらすような踊りはなかなかないでしょう。楽器の音はとても柔らかく、それに合わせて、踊りも柔らかく、長く続いていきます。踊り手はいったん目を閉じて少し

⁶⁴ 同、96頁、手紙41。

⁶⁵ ハレムにおける音楽については、主に以下2冊を参照した。クルーティエ、前掲書、57頁。Pars Tuğlacı, *op. cit.*, pp. 96-107.

⁶⁶ 別冊『トルコ書簡集』60頁、手紙31(1717年4月1日アレクサンダー・ポープ宛/アドリアノーブル)

⁶⁷ 同、109頁、手紙46(1718年4月10日プリストル夫人宛/コンスタンティノーブル)

⁶⁸ 同、74頁、手紙34(1717年4月18日マー夫人宛/アドリアノーブル)

止まり、後ろの方に体を倒したかと思うと、今度はまた優美に体を起こして再び踊り出すのです。」⁶⁹

もう1つ、正確な意味での娯楽ではないが、娯楽的要素を持つものとしてスルタンや大宰相の行列があげられる⁷⁰。新しいスルタンが即位した時はもちろん、戦いの前や、勝利や婚礼の祝いの際には、大変豪華な行列が組まれた。中でも、婚礼の際の行列などは、花嫁道具などを一つ一つ運ぶこともあって、とても長く続いたようだ。ここでは、メアリーが目にした大宰相の行列の様子を紹介したい。

「宮廷の警備にあたる兵士たちは皆とても体格が良く、色とりどりの素晴らしい衣服を着ていましたので、遠くから見ると、まるで花壇に咲くチューリップのようでした。兵士の次はイエニチェリの隊長で、銀色の糸でふちどられた紫色のピロードの服を着ていました。隊長の馬はといえば、これもまた大変きれいに着飾った2人の奴隷に引かれています・・・(中略)・・・宦官は、数々の宝石で飾られた、立派な馬に乗っています。宦官の次には、美しく飾った馬がさらに6頭も続きました。宦官の側近のうち、一人は旗棹に金を持ち、もう1人は銀のコーヒー入れを捧げ持っていました。もう1人は、宦官が座るための銀の椅子を頭にのせて運んでいました。一人一人の服装やターバンの違いで身分が表される、という話をずっとしていても、きっと退屈になってしまいますね。とにかく、何千もの数の人がそれぞれ華やかで美しい様子で歩いてきますので、これほど素晴らしい行進はめったにみられないものだと思います。」⁷¹

なんとこの行列は、8時間近くも続いたという。他にも騎兵や奴隷たちが、それぞれ着飾って何千人も行進してきたのである。女性たちは表に出てそれを眺めることはないものの、それぞれの屋敷の窓から、飽きることなくこうした行列を眺めて楽しんだ様子であった。メアリーは、2度ほどこうした行列を見る機会に恵まれたようで⁷²、いずれの時には、他の女性たちと一緒にコーヒーなどを楽しみながら見学している。たぶん、当時のアドリアノーブルやコンスタンティノーブルに住む貴婦人たちの多くは、メアリーのように窓越しに華やかな行列を見て楽しんだのであろう。

⁶⁹ 同、74頁、手紙34(1717年4月18日マー夫人宛/アドリアノーブル)

⁷⁰ Pars Tuğlacı, *op. cit.*, pp. 255-260, 271. 図10参照。

⁷¹ 別冊『トルコ書簡集』54-55頁、手紙29(1717年4月1日ブリストル夫人宛/アドリアノーブル)

⁷² 註71であげた手紙29に加え、78-79頁、手紙35(1718年5月17日アベ・コンティ宛/アドリアノーブル)

3) 入浴文化

3 - 1 公衆浴場の歴史⁷³

旅の途中、当時のオスマン帝国領土ソフィアにおいて、メアリーはイスラムの公衆浴場、ハمامに初めて足を踏み入れた。まずは、メアリーの体験をなぞってみる前に、ハمامの歴史と役割を簡単におさらいしてみたい。もともとハمامとは、アラビア語のハンマームから来た語で、「熱い空気・湯の供される場所」という意味を持つ。オスマン帝国におけるハمامの歴史は古く、ビザンツ帝国時代からの流れをくむものだという。1543年にコンスタンティノープルが征服された際、街には古代ローマの伝統を受け継ぐ公衆浴場が存在していた。ローマ時代から、人々は洗浄のみを目的とする公衆浴場ではなく、娯楽・社交の一部として長時間かけた循環入浴⁷⁴を楽しんでいたのである。その後本家のローマでは、公衆浴場が男女混浴・売春などの温床となっている、という非難が上がり、4 - 5世紀頃から入浴文化は衰退の一途をたどることとなった。

イスラム教では、身体を清潔に保つことも、イスラム教徒としての義務と考えられている。そのため、オスマン帝国では、ローマの浴場文化とあいまって、実に豊かな入浴文化が花開いた。オスマン帝国の浴場は、たいていワクフ制度⁷⁵によって運営されることが多く、モスクなどと共に建てられることが多かった。イスラムの他の国々では、男女の入浴を時間によって区切るところも多かったものの、トルコでは、男女別々のセクションを建設することが普通である。中の造りはどちらも同じで、古代ローマの循環入浴の習慣を踏襲した、脱衣・休憩室、温浴室、熱浴室からなる。この2つの結合部分が、温室になっていて、ハمام建築の中心をなす。男性浴場の入り口は、広場や大通りに面して置かれるのに対して、女性用の入り口は裏側にあるか、階段を下りて入るような造りになっている。人々は、こうした浴場で丸一日を過ごし、入浴だけでなく、おしゃべりや情報交換をして楽しんだのであった。現在のトルコでは、こうした豊かな入浴文化は欧米式の生活にとってかわられ、ハمامの数も激減した。しかし、イスタンブールのガラタサライ・ハمامや、エディルネのソコルル・ハمامなど古くから残るハمامもあり、昔ながらの垢すりなども体験することが

⁷³ 公衆浴場の歴史や入浴方法については、主に以下2冊を参照した。杉田正明『浴場から見たイスラム文化』山川出版社、1999年、6 - 18、26 - 30、59 - 66頁。八尾師誠『銭湯へ行く・イスラム編』TOTO出版、1993年、4 - 12頁、201 - 208頁。

⁷⁴ ローマの浴場は、さまざまな用途を持った浴室の集合体であり、人々は脱衣室・冷浴室・温浴室・熱浴室を巡回しながら、入浴を繰り返した。洗浄だけでなく、社交・娯楽の側面も大いにあったという。

⁷⁵ 宗教寄進制度。ある私財の所有者が、一定の宗教・公共目的を設定し、将来的にもその目的のために私財からの収益をあてることを誓い、私財を寄付すること。施設運営の収益の一部は、自分の子孫が受けることも常識的に認められており、この制度は大きな広がりを見せた。

できる。

このようなイスラム世界の入浴文化に対して、ヨーロッパ側はどうであったのだろうか。すでに見たように、最初に浴場を発達させたローマの浴場は衰退し、その後 12 世紀頃になるまで、ヨーロッパで公衆浴場は作られなかったという。もちろん、それ以前にも身分の高い騎士階級の人々が、寝室等で湯浴みをする様子などは文章に残っているが、制度としての、公衆浴場ができるまでにはかなりの年月が過ぎている。12 世紀以後は、健康上の理由や社交の一環として入浴が行われたが、浴場は 16 世紀になって再び急速に減少する。伝染病の流行、さらに公衆浴場が売春浴場となっていったためである。

しかし、第二次ウィーン包囲以後、オスマン帝国の入浴文化が、少しずつヨーロッパ側に伝えられるようになった。それまで脅威の対象としてのみ存在したオスマン帝国、その独特の文化にヨーロッパの人々は興味を抱く。公衆浴場も、もちろん大いに興味の対象となったであろう。1683 年には、ロンドンに最初の「トルコ風」浴場が作られ、その後 18 世紀の終わり頃まで、トルコ風浴場が作られていく。どうやら、これらの浴場は売春を売り物としていたようで、人々に間違ったイスラム観を植え付けたようである。日本で「トルコ風呂」がいかかわたしいものとして見られたのも、この流れであると考えることができる。

19 世紀後半、画家アングルが、後ほど取り上げるメアリーの手紙の一節に触発されて、有名な「トルコ風呂」を描いている⁷⁶。しかし、その絵は、鍵穴から覗き見た女風呂の様子であり、ヨーロッパ人が抱く夢想の世界であったと言っても良い。その頃になると、それまでの売春の温床としての浴場ではなく、健全なイスラム風の浴場も作られるようになるが、大変清潔だが簡素なもので、イスラムの豊かな入浴文化が、ヨーロッパには根付かなかったことを示している。

3 - 2 メアリーハمام体験

18 世紀の始め頃のヨーロッパでは、イスラムの公衆浴場は、前述したように興味の対象である反面、どこか怪しげなイメージが先行していたのではないだろうか。17 世紀には、ロンドンにトルコ風の浴場が作られていたとはいえ、メアリーが浴場に足を運んでいたとは考えにくい。イスラムの公衆浴場の役割や、その歴史等についての知識があったかどうか、疑問である。メアリーの浴場についての記述には、素直な驚きが表れており、見たものを正直に書き綴って

⁷⁶ Jean Auguste Dominique Ingres (1780-1767) フランス、新古典主義の画家。『トルコ風呂』は 1859-63 年の作品であり、メアリーの『トルコ書簡集』の抜粋が彼のノートにメモとして残っていた。現在この絵はルーヴル美術館に所蔵されている。杉田、前掲書、62 - 63 頁。

いる印象を受ける。

では、メアリーと共にソフィアの公衆浴場へ出かけてみたい⁷⁷。時は 1717 年の春先、朝の 10 時である。朝早くからにもかかわらず、公衆浴場には、もう多くの女性たちでにぎわっているようだ。入り口には女性の門番が立っており、チップとしていくらかお金を払うのが習慣らしい。入り口の次は脱衣・休憩室となっており、そこを通り抜けて浴室の中心部へ入る。

「ハマムの建物は、窓のない石造りのドーム型ですが、天井に明かり取りの小窓があるので、そこから光は十分に入ってきます。このような部屋が 5 つほどくっついてハマムを構成しており……」

メアリーの記述の通り、トルコ式ハマムは、たいてい全体がいくつかの丸いドーム型の屋根で覆われていた。天井が高く、広々としているのが好まれたという。浴場の中の床には、たいてい大理石が使われたが、これは熱をよく伝え、防水性に優れていたからである。天井の明り取りの穴からは、十分に明かりが差し込むも、湯気の効果でなんとも幻想的な雰囲気が漂っているのである。

「……次の部屋は、とても広くやはり大理石造りです。そして、ぐるりと大理石のソファが置かれていました。この部屋には、4 つほど冷たい水が出ているところがあるのですが……(略)。その隣の部屋は少し小さめで、同じような大理石のソファがありますが、硫黄の温泉から出る湯気でとても暑く感じました。あまりに暑くて、服を着てはいられないほどです……(中略)……部屋を行ったり来たりしては、自分の好みで体温を調節できるようになっていました。」

脱衣・休憩室から中へ入る時には、たいていは高下駄をはくことになっている。高下駄を使用するのは、滑り止めや、熱くなった床でやけどをしないようにという配慮である。おそらく、メアリーは服を着たまま、温浴室・熱浴室の順に浴場を見学したのであろう。本来ならば、この順番でゆっくりと体温を高め、もちろん服は脱衣・休憩室において湯を浴びたり、浴槽につかたりして 4 - 5 時間かけて入浴する。洗髪や垢すり・脱毛などの世話をする者も控えており、必要に応じてサービスを受けることになる。一通り入浴を終えた者は、脱衣・休憩室に戻ると、コーヒーを飲んだり、おしゃべりをしたりして、さらに長い時間を過ごすのであった。

「つまり、わかりやすい言葉でいうと、全くの裸で、いかなる体の美しさも欠点も、全く隠されていないありさまでした。でも、本当に淫らな笑いを見せるものや、下品なしぐさをする人はいなかったのです。皆、まるでミルトン⁷⁸が

⁷⁷ ソフィアの公衆浴場についての記述・引用は、すべて別冊『トルコ書簡集』46 - 48 頁、手紙 27 (1717 年 4 月 1 日宛先匿名 / アドリアノーブル) による。

⁷⁸ John Milton(1608-74) イギリスの詩人。『失樂園』を著す。

聖母マリアを表現した時のような、大変な優雅な様子で動いているのでした。あたかも、グウィドやティツィアーノ⁷⁹が描いた女神たちのように美しい女性も、たくさんいます。肌はつやつやと白く輝き、唯一の飾りは、長くふさふさした、美しい髪の毛でした。その巻き毛はゆるやかに肩にかかり、真珠やリボンがその髪に輝いている様子は、まさに美の女神そのものだったです・・・(中略)・・・おしゃべりをしている者や、手仕事をしているものがあると思えば、コーヒーやシロップ水を飲んでいる者もいます。多くの者がクッションの上に横になっている傍らで、奴隷娘たち(たいていは 17、18 のかわいらしい少女たち)が巧みな指さばきで髪の毛を編んでいるのです。」

このように、脱衣・休憩室において、乗馬服姿のメアリーは、多くのトルコ人女性たちが女奴隷を従え、思い思いにくつろぐさまを目にするのである。200 人も女性がいる、と彼女は記述しているが、本当にそれほどたくさんの女性がいたかどうかは分からない。しかし、100 人を越える女性が、全くの裸でくつろいでいる、という光景が、メアリーにとっては大きな衝撃であったことは想像に難くないだろう。入浴の習慣のおかげか、どの女性も輝くような美しい肌をしており、それもまたメアリーの驚くところとなった。しかし、逆にトルコの女性たちの目にも、服を着たまま、しかもヨーロッパの服装で浴場にやってきたメアリーは、相当奇異に映ったに違いない。メアリーも、彼女たちの驚きを押し量っている。

「・・・こちらの女性たちの目には、(私の服装は)大変奇妙に映ったことと思います。しかし、誰一人としてそのような驚きや、無遠慮な好奇心をあらわにしませんでした。それどころか、とても礼儀正しく親切に私を迎え入れてくれたのです・・・(中略)・・・この浴場には、きっと 200 人くらいの女性がいたと思われるのですが、軽蔑の眼差しや嘲笑などは全く見られませんでした。」

女性たちは大変に美しく、上品な様子で、メアリーを眺めて口々に“Güzelle, pek güzelle!”(なんときれいなんでしょう!)と言いつつという記述があるが、これはおそらく“Güzel, pek güzel!”というトルコ語の誤りであろう。彼女たちの側もメアリーのほうに大変興味を持っており、中でも 1 番身分の高そうな女性が、メアリーを自分たちの側に招き寄せ座らせる。そして、服を着たままのメアリーに入浴を勧めようと、服を脱がせようとし始めた。

「・・・皆はとても熱心に服を脱がせようとしています。ついに私は一計を案じて、上着を開け、私のコルセットを見せました。それを見ると、皆納得したようでした。コルセットを取るのは無理らしい、思ったからでしょう。どうやら、夫がこんな妙な器具を身に着けさせているのだ、と口々に言っていたようでし

⁷⁹ Guido Runi(1575-1643) Tiziano Vecelli(1478-1576) ボローニャの画家。

た。」

こんなハプニングはあったが、メアリーはソフィアの公衆浴場で、実に楽しい時間を過ごしたと記述している。おそらく、それから女性たちはメアリーを座らせ、コーヒーやシロップ水などを飲みながら、身振り手振りで交流を楽しんだのであろう。実際、入浴は、普段不自由なことも多い女性の生活において、気兼ねなく楽しめる、美容と健康を兼ねた最大の娯楽であった。女性たちは、自分の女奴隷を連れてハمامへ赴き、そこでは街中の噂話や情報がささやかれる。メアリーが「コーヒーハウス⁸⁰の女性版」と表現したのは、まさに的確であったと言えよう。(図 11)

3 - 3 ハمامの日常性と非日常性⁸¹

女性たちの日常的な社交の場として機能していたハمامには、それとは異なった他の側面があった。儀式が執り行われるような、非日常・祝祭的意味や、品定めのある場、としての役割を持っていたのである。例えば、出産を間近に控えた女性が、安産の効果を考えてハمامへ出かけたり、出産後にも健康のために再び入浴しに行ったりする。また、女奴隷の仲介をする者たちは、ハمامへ出掛け、奴隷女たちの姿や動きを観察したのである。息子の花嫁探しをする者も、同様に、若い女性たちを眺め、品定めをする。これは、いわば女性たち共通の公共の場が、ハمام以外には存在していなかったことの表れでもあるだろう。

中でも、結婚式は、ハمامとの結びつきが非常に強い。結婚式の前夜に、花嫁が身を清めるのはとても大切なことであった。そこで、花嫁は多くの親戚、友人、隣人たち、そして嫁ぎ先の女性たちに付き添われてハمامへ出向き、そこで長時間かけて入浴を行うのである。ハمامを貸し切り、終日入浴をすることもあったという。結婚するまでは体毛は取り除かない、という習慣があるため、花嫁は結婚するにあたって、初めてきれいに体毛を除去する。そして、ヘンナ⁸²を花嫁の爪や手足に塗って飾り立てるのである。そして、集まった女性たち、特に若い女性たちは、ハمامの休憩室を舞台に、華やかに歌ったり踊ったりする。集まった女性たちには、お菓子や飲み物が振舞われ、ハمامはまさに宴会の場として使われていたのである。このような習慣は、20世紀になっても一部の田舎で残っていたようだ。

ソフィアでハمامを見学したメアリーは、翌 1718 年に、再びハمامを訪れ

⁸⁰ 当時イギリスでは、知識人や作家たちがコーヒーハウスに集い、詩を書いたり、議論をしたりして過ごしていた。情報・文化の発信地と言える。前掲書、相島、94 頁。

⁸¹ 主にクルーティエ、前掲書、81 - 91 頁。及び八尾師、前掲書、52 - 53、164 - 167 頁。

⁸² ヘンナの葉からとった、オレンジ色の顔料。髪を染めるのにも使われていた。

ている⁸³。今度はコンスタンティノーブルで、非日常的なハマムの様子を垣間見ることができたのである。おそらく、メアリーにとっては2度目のハمام体験であるから、最初のソフィアの時ほど驚かなかったに違いない。しかし、ハمامを結婚式祝いの場にする、というイスラムの習慣は、メアリーの目にどのように映ったのであろうか。イギリスの上流階級出身の女性としては、自分が服を脱ぎ、この「裸の付き合い」加わることには相当の抵抗があったと思われるが、ハمامにおける祝祭の光景に対しては、好意的な目で見ていたことが、以下の記述から推測される。

「公衆浴場では、花嫁の友人や親戚、新しい家族女性ばかりが一堂に会していました。ただ見にやってきた部外者も合わせると、そこには少なくとも200人ほどの女性が集まっていたように思います。結婚している女性たちは、部屋をぐるりと取り囲み、ソファーに腰掛けていました。未婚の若い女性たちは、服を脱ぎ、長い髪と髪を飾る真珠やリボンだけを身につけて、その場に現れたのです・・・(中略)・・・2人の少女が、香水の入った銀の入れ物を捧げもって行進を始め、その後には30組ほどが続きました。先頭の少女が結婚歌を歌うと、他の少女たちもそれに合わせて歌います。最後の2人が花嫁を導きなら歩くのですが、花嫁はかわいらしく目を伏せ、謙遜を表します。このように、公衆浴場の中の部屋を練り歩くのです。どれほど美しい光景であったか、うまく説明することができません。少女たちは皆美しく白い体で、入浴を繰り返しているのですべてと輝くような肌なのです・・・。」

古代から、イスラム世界、トルコにおける入浴は、単なる清潔を保つためだけでなく、社会的な行動として行われていた。つまり、ハمامは、日常のおしゃべりの場から、婚礼のような特別な場まで、女性にとってはほとんど唯一の公共施設だったのである。メアリーは、そんなハمامに足を踏み入れた、数少ないヨーロッパ人であった。そしてまた、ハمامの持つ社会的な意味や、女性たちにとっての役割を正しく感じ取り、それを積極的に表現していると言えるだろう。

⁸³ ハمامでの結婚式の様子は、別冊『トルコ書簡集』112頁、手紙48(1718年5月宛先匿名ノコンスタンティノーブル)に描かれている。

おわりに

以上、メアリー・ウォートレー・モンターグ夫人の目を通して見た、18世紀初頭の女性たちの様子を眺めてきた。この『トルコ書簡集』を読んでもと、メアリーが実に詳細に観察しながら、短いトルコ生活を楽しんだことがわかる。メアリーの描く女性たちは生き生きと美しい様子である。女性たちの文化・風俗について知る上での、大変貴重な資料となっている。

本論中では取り上げられなかったが、女性の結婚・再婚の話と出産についても『トルコ書簡集』中に多くの記述がある⁸⁴。結婚についてはキリスト教国との間にずいぶん違いがあるようなので、他の資料を詳しく検討し調べてみる必要があるだろう。ここで簡単に触れておくと、再婚について、メアリーはキリスト教国と違ってトルコの女性たちがすぐに再婚する、と述べているが、良い悪いの形で結論付けてはいない。また、メアリーはトルコの女性たちが子供をたくさん産まされているとして、手紙の中で何度も苦情を語っている。事実、トルコでは、生まれてくる子供が男か女か、子供を産めるのか、というのは重要なことであつたし、たいていの家が子沢山であつた。出産は祝祭のように扱われたという。(図 12)メアリー自身、トルコ滞在中に娘を出産したこともあり、非常に興味のわく話だつたと思われるし、トルコの習慣の中で1番気に入らなかつたもののようでもあつた。

しかし、全般的に、メアリーはトルコの女性たちに好意的であり、女性たちは大変自由で、「閉ざされた」イメージを持つのは間違いだと語っている。そうは言っても、外に出られない、ヴェールを被らねばならない、など女性に対する制約は多い。公衆浴場以外に、女性たちの公共の場はないなど、ある意味社会から隔離されていると言っても良い状況であつた。決して自由とは言えない状況であると思う。では何故、メアリーはそれを自由と表現したのか。

おそらく、メアリーの言う「女性たちの自由」は、ある一定の条件下での自由であつたのだと思われる。例えば、次のようなことだ。外出時にはヴェールさえ被っておけば、誰にも文句を言われず街を歩いたり、夫に対して不貞を働くことすらできる。ハレムの中では、自分の好きなように宝石や衣装で身を飾れる。女性の公共の場は公衆浴場だけ、とは言うが、その公衆浴場では、美し

⁸⁴ この話題については、以下の部分で繰り返し述べられている。別冊『トルコ書簡集』手紙 30 (58 - 59 頁)、手紙 36 (83 頁)、手紙 39 (89 頁)、手紙 40 (91 頁)、手紙 47 (110 頁)、手紙 48 (111 頁) 等。

さに磨きをかけると同時に、社会的な付き合いもできるのである。トルコの女性たちは、規定の条件を無理に変えようとはせず、その中で精一杯美しく、楽しく生きていったのであり、メアリーはそれを好ましく眺めていたようである。

ただ、『トルコ書簡集』を資料として利用する際には、メアリーの性格を考慮に入れなければならない。全体を通して、自分が良いと思ったものに関しては大げさなほど立派に描き、気に入らなかったものははっきり批判する、という傾向が見られる。冷静な観察者である反面、いささか皮肉っぽい表現もある。それを踏まえた上で事実関係を確認していけば、より確証の高い資料となりえるだろう。読み物として読むならば、独自の物事に対する評価や機知に富む文章は、非常に面白いところである。本国イギリスでも、比較的政治に近いところにいたせいもあって、オスマン帝国領土にいかにも多民族が共存しているか、政府の圧政や軍隊の暴虐ぶり、文学的なやりとりなどその関心は多岐にわたっている⁸⁵。通り過ぎた土地それぞれの、特徴や歴史を上手く表現しているところも興味深く、メアリーの知識の深さがうかがえる⁸⁶。本論では主立って取り上げることはなかったが、社会の別の面を考えるのに役立つものであり、それは今後の課題としたい。

メアリーは、当時の女性としては、大変に好奇心旺盛で、活動的な人であった。また、偏見なく東洋世界を表現し得た、数少ない西洋人のうちの1人でもあった。しかし、メアリーの才能や行動力は、残念ながら女性への制約が多かった18世紀には、なかなか受け入れられないものでもあったに違いない。だからこそ、メアリーは、限られた中で楽しみを見つけながら、日々美しさや楽しさを追求して暮らすトルコの女性たちになおいっそう共感し、詳細に彼女たちの様子を観察したのでだろう。そして、その後のメアリーの行動や考え方に、トルコでの経験が影響を与えているのは明らかだろう。コンスタンティノーブルからの最後の手紙には、メアリーのそんな思いが正直に表れている。その率直な感想を持って、本論を締めくくりたいと思う。

「人間は、自分が育てた果実を収穫する前に年を取り、死んでいくのです。人生がどれほど短いか、そして人間がどれほど弱いかを考えた時、今この時の楽しさを学ばずして、他にどんな有益な学びがあるのでしょうか？・・・(中略)・・・私は、あれほどの知識を持ったアイザック・ニュートンになるよりも、

⁸⁵ オスマン帝国の圧政の様子は、旅の前半ベオグラードやペーテルヴァラドからの手紙参照。別冊『トルコ書簡集』35 - 43 頁、手紙 23・24。多民族の話は、旅の後半に繰り返されている。主に手紙 40 (92 - 93 頁)、手紙 42 (101 - 102 頁)、手紙 48 (113 - 115 頁)。文学的な話は、アレクサンダー・ポープへの手紙が中心。手紙 31 (59 - 64 頁)、手紙 58 (136 - 137 頁) 等。

⁸⁶ 移動のたびに、その地の名所・歴史を説明した。中でも船旅による帰途の様子を伝える手紙 (別冊『トルコ書簡集』118 - 125 頁、手紙 50) には、古代ローマ・ギリシャについての豊富な知識が惜しむことなく表現されている。

全く無知な、でも人生の楽しさを知っているトルコ人のエフェンディになりたい、と思っているのです……。」⁸⁷

⁸⁷ 別冊『トルコ書簡集』118頁、手紙49(1718年5月19日アベ・コンティ宛)